
True Night

如月 琴李

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

True Night

【Nコード】

N5694Y

【作者名】

如月 琴李

【あらすじ】

月夜に翻る黒い装束、銀色の仮面、人は彼を怪盗黒猫と呼ぶ。ただ、ある冬の日の夜いろんな偶然が重なって、不幸を呼ぶ存在だとな乗る彼と出会った私は、どうしてもその姿を憎めなかった……。でも私は、どこの誰だかわからない怪盗のことなんか考えてる暇ないの。8年間ずっと顔を忘れた「彼」に会いたいから。見つかるかどうかわからなくても会えると信じてずっと生きてきた。だからその時まで、まだ知らないでいたい。……結論として王道を突っ走ってるどこか遠い外国の意固地な二人の物語です。（閉鎖サイトから

の転載になります)

1・暗い影の訪れ（前書き）

若干見切り発車かもしれませんが。妄想が止まらなかったんです。ということに興味しか入ってませんが、頑張ります。暇つぶしにでもしてください。

1・暗い影の訪れ

丸い月に暗い闇。浮かび上がるは黒い影
その姿を見たものは皆、彼をこっ呼んだ。

「黒猫」 と

黒猫は避けて通れ

誰が初めに言ったのか、この世にそんな言葉のある——時代の中
で。

記憶にうつすら残っている微かな思い出。
顔は思い出せなくてもずっと何かが頭をとりまいていて。

『帰ったら聞いてくれ』

声変わり前の少年のアルト声は……今も忘れない。

「……きな……い……起きなさい……起きなさいってばっ！」
そんなこと言われても無理だって。どう考えてもベッドの気持ち
よさって犯罪だと思う。あの暖かさとぽかぽかさは他のどこに行っ

ても体感できるものじゃないもの。

だからなかなか出られない。出なきゃ何にも始まらないと分かってても、特に今の季節、つまり冬にここから出るには、人間の樂園追放と同じくらいの覚悟がいると思う。（いや、知らないけどね）
「起きなさい！！」

だからこの暖かさをみすみす手放す気にはなれないって。かとい
って起きなければ

バフツ

こうやって布団を引つpegされるのだ。既にいつもの事だけれど、
急激にふんわりした毛布の柔らかさと共に、体を取り巻いていた暖
かさまで一瞬でなくなる。これ、まだ私だからいいけど、老人にや
ったら確実に心臓止まると思うよ？

「ほら早く起きてリーラ」

体を貫く寒さに耐え切れずに瞼をうつすら開けたら………傍にい
たのは大好きな人。勘違いして欲しくないから言っけど女性だ。で
も朝一番にそんなに思考は働かない。

「ラルタ……………どうして起こしにくるの……………ねむいー」

つい起き上がりながら、突っぱねるようなことを言ってしまう。

……………ごめんなさい。でもね

「だってあんたが自分で起きるの待ってたら日が暮れるから」

この人も口の悪さには定評あるからまあいいかって思う自分もい
るのよね。

「……………それは酷いんじゃないの？」

「本当のことでしょう？」

「……………」

ここまで言われても否定できなかった。

そして、そんな何も言い返せない私の頭の上から、更に降ってくる容赦のない声。

「いい加減にその寝坊癖直さないと、社会に出て困るわよ？」

「一体何年先の話よ。大体……ふぁ……今日日曜日でしょ？」

カレンダーを見ながら伸びをして、あくびをする。確かに今時刻は9時で結構な寝坊ではあるけど、日曜日位いいと思う。

「そうよ。でも今日みたいな重大な事件があつた日に暢気に寝てるなんて馬鹿のすることよ」

「へっ 重大事件？」

するとラルタは急に私の目線に合わせるようにかがみこむ。そして真剣な面持ちでゆっくりと告げた。

「……この町に——黒猫が現われたの」

「は、はぁああ……！！！！っ」

完全に目が覚めた私はベッドで座ったまま文字通り数センチ飛び跳ねていた。その単語には嫌な意味での聞き覚えがあつた。

大体黒猫なんて不幸を呼ぶ名前にいい聞き覚えがあるわけもない。「シャットさんの家を昨夜荒らしたって」

「……で、捕まったの？」

「捕まったら私は日曜からこんな風にあんたを起こしに来ないでしょうっ」

「……………確かに」

『黒猫』……今のご時世その名を知らないのは、よっぽどの世間知らずか、世捨て人かつてぐらい話題沸騰中の人物だ。でも彼はアイドルや絶滅しかけの貴族じゃない。荒らしまわる捕まったと言う言葉から推測して欲しい。信じられないかもしれないけれど……………怪盗なのだ。

人呼んで怪盗黒猫。

かの有名な怪盗アルセーヌ・ルパンの手口がどれほど鮮やかでも、所詮それは小説のお話。黒猫は、今この時代に実際にいて、様々な町の闇に出没し……鮮やかな手口で金目の物を奪い去って、消えていく——まさに神出鬼没の大怪盗。ただし彼は小説で読んだ他の怪盗のように予告状は出さない。だからどこに現れるか分からない。それが理由で一部の人は怪盗の美学に反するとか何とか言っているらしい。ただ、私個人の意見としては、もしあったとしても結局捕まえられないんだから無駄だと思う。その小説がそうで、無駄な労力っていう言葉がぴったりだった。

それでも彼が怪盗として名をはせているのは、その姿形が泥棒というにはあまりにも特殊すぎるせいだ。見た者が一様に声をそろえるその格好は、真つ黒なスーツにマント、加えて顔の上を覆う銀色の仮面は性別すらも判然としない幻想的な空気を醸し出している。

ちなみに彼に黒猫と名付けたのは、世間の人々だったりする。月夜に浮かびあがる黒い姿と、闇の中を飛び交うあざやかな身のこなしは猫のようであり、さらには狙った家には必ず損失をもたらすので、と誰ともなく言いだして、定着したらしい。美術館や、宝石店は一切襲わず、個人邸宅ばかり狙うのも特徴で、それも決まった住処を持たない野良猫を連想させる。だからこうしてラルタが私にわざわざ報告に来るのだろう。

「この家にも入るかもしれないわね」

現に溜め息をつきつつラルタが窓を見つめていた。この家は、豪邸とは言い過ぎだが、住みこみメイドや警備員もいる立派な邸宅だから、その心配はよく分かる。

「……………その時は私が捕まえるから安心して！」

そして私はそんなつもりはなかったはずなのに、いつのまにかものすごく勢い込んでいた。まあ無理もないかと自分に言い訳をして深呼吸して落ち着いているとラルタがふつと笑った。

「……………リーラ。気持ちとは分かるけどね。あんたは女だから、おと

なく警察に任せたほうがいいわ」

「な！ 馬鹿にしてるラルタ！？ 私だてに体鍛えてるわけじゃないのに！」

一応小さい頃から一生懸命剣だの、格闘技だのやっているのはこういう時に一矢報いるためなんだけど。なんで頼ってもらえないんだろう。

「……別に馬鹿にしてるわけじゃなくて。あんまり無理させると父様や母様が心配するのよ」

「いいもん別に。自分の身くらい自分で護れるし」

「それだけじゃないんだけど……」

ラルタは溜め息をついた。その理由は勿論今燃えているリーラが知る由もない。

「まあいいわ。ほらさっさと着替えてご飯食べに降りてきて。ものすごくメイドたちが困ってるの」

そう言って部屋を出て行った。

「はいはい………悪うございました」

ラルタの消えていった扉を見ながら自分ももしかしたらメイドの身分にいたのかも知れないと思いつつ、ゆつくりと伸びをして周りを見渡す。目に映るのは結構な値が張る家具達。私がラルタから『借りて』いるものだ。期間はもう十年近くになるけれど名目上はそうなっている。

ベッドから出て、カーテンを引き、パジャマを脱いで、等身大の鏡に映る自分の姿を見た。スタイルは無視するとして、肩まであるこげ茶色の髪に緑の瞳の少女がこちらを見つめ返している。

どうみても異国の血が入っているこの瞳。そして青い宝石のネックレスがちゃんと首に掛かっていることを確認した。私がこの家に来た時に、初めてプレゼントされたものだ。

これだけは、無くすわけにはいかない。

あの時

口が悪いながらも優しいラルタがもしも必死に彼女の両親に『引き取って』と頼んでくれなかったら。私も彼と同じく今頃は孤児院行きだった。

そしてこんな不自由ない暮らしなどできるはずもなく細々と過ごす日々だったはずだ。

その『彼』が誰かは、もう思い出せないけれど

顔も名前も忘れてしまった。既に残っているのは一緒に過ごした時間と、傍にあった温もりと彼の不器用な優しさだけ。

いつかラルタに『それ初恋でしょ？』と言われたのだけれど、どうなのか。だってそれは既に私の中で『思い出』としてあるもので小説を読んだ時の主人公の言葉のような、胸をさす感覚や心臓が止まりそうな感覚や、ぼうつとしてしまつて食事も喉を通らないとかいう感覚は全くないから。あるのはそう

ほんわりとした暖かさと、胸に甦る寂しさ。けれどそれを時間という一瞬一瞬厚くなつていくベールがどんどん被さつて、見えなくしていく感覚。

本当のところもうこの思いがどういうものなのかも分からない。でもそれでもいい——きつともう出会うことはないのだし、もうすぐ忘れてしまうのだと漠然と思うから。

8年も経つた今いくら会いたくてもそれは無理なことだと感じていた。

中身のなくなつた暖かさだけを残して思い出に変わってしまった

記憶なんか――

私なんか忘れてる気が、あ、そうそう自己紹介！

私はラルタはじめリーラって呼ばれているのだけど、本名はリルト・アンテール。見ての通り少々寝坊癖のある、でも元気一杯の小説が好きな17歳です。で、私を起こしにきたラルタの本名はラルタ・ディロツトで、私をはじめ、皆ラルタと呼んでいます。まあ彼女自身はディロツトって言われる方がいいみたいだけど（響きの）、でもそうすると彼女のお父さんもお母さんもおんなじだから誰を呼んでるのか分からないし、構わずラルタと呼んでいます。

同じ年だけど、生まれたのは私より1ヶ月ほど早いからってのでさつきみたいによくお姉さん気質を私に向かって発揮してきたりすることもあるんです。あ、勿論それが嫌ではないのだけれど。

ちなみに私とは大親友であり姉妹の関係。

でも、どうして私とラルタの名前が全くかぶっていないのかといえば……さつきも少し書いたけど、それは私がこの家でよく言えば養女、悪く言えば居候の形をとっているから。ラルタの家はお金持ちで、人一人増えたからって全く問題ないほど裕福だから、という理由でお世話になっています。感謝してもしきれないのですが、その本当の経緯については又いずれ話す機会があればという事にしてまあ私達についてはこんなところです。

私は、着替え終わってからなるべく静かに部屋を出た。

けれど出来るだけ音を立てないようにしていたにも拘らず、私が階段を降りる音を耳ざとく聞きつけたらしい。

「遅すぎリーラ。どれだけ着替えに時間かけたら気が済むの？」

食堂にいたラルタからいきなり毒舌が飛んで来た。ちょっとむっとしたけれど、だいぶ時間が経っていたのは事実だ。

「ごめん。ちょっと考え事してて……………」

座りながら素直に謝ると、彼女は少しその唇に笑みを浮かべた。

「また『彼』？」

そう言われれば私はどうしても恥ずかしさに頬が熱くなるのを抑えられない。こうして誤解されていくのだ。

「ちよっ違っって」

「凶星ね」

表情はあまり変えないながらも、楽しそうに言うラルタを見てみると、つい自分っていい力モなんだなあっと思ってしまう。勿論ラルタは猟師だ。けれどそれではちよっど悔しいので

「……………あのねえ『彼』はもう思い出の住人だって何度も言うてるでしょ？それにラルタはそういう人はいないの？」

逆に聞いてやる。すると彼女は僅かに楽しそうだった表情を一瞬でひっこめた。

「いる訳ないでしょう？」

即答の上に疑問形。いや聞かれても困るんだけどなあ。答えは分かるにしても。

思い切って私は話題を変えてみることにした。

「でもラルタって、そんなに綺麗なんだし…………ファンも多いし…………彼氏ぐらい作ればいいのに……………」

「…………嫌よあんな下等生物」

「…………今、世界中の半分の人を敵に回す発言したことに気付いてる？」

あんまり辛辣な言葉を一応確認してみた。

「それが何よ？」

ラルタは表情一つ変えないままにコーヒーにミルクを入れている。しかもまたしても疑問形。答えは見えただけ今度は答える気がしない。私の完敗だった。

「もういい……」

「そう？」

これで分かったと思うけどラルタってすごい男嫌いなんです。つくづくもったいないと思う。

なんてったって黒い瞳に黒い髪、女の私でもうらやむほどのラテン系のものですごい美人で、おまけに頭も良くてお金持ち。性格はちよつと問題あるけどね。でも本人が『下等生物』って言うてたんじゃないでしょうもない気はする。それにしても、この世には男と女しかないって事ちよつとは分かってもいいと思うんだけど。

そんなことを考えていたらいつの間にか何もなかったテーブルに朝食の用意が並べられていた。

私は傍にいたメイドさんに『ありがとう』を言つて、実は空腹を我慢していたお腹を片手で押さえ、パンを手を取った。お腹が鳴るのがマナーに反するってことぐらい私だって知ってる。

すでに朝食を食べ終わっていてやることがないのか、ラルタは私の正面でコーヒーを飲みながらくつろいでいた。

断っておくけれど、どこかのお城のように二人の距離がものすごく開いてるって事はない。ラルタはお嬢様だけど、ディロツト家の人々はみんな仲が良く、団欒を大事にしている。だからテーブルも4人家族の標準サイズで、大体2メートル位かな。

それから15分後、私はかなりへこんでいたらしいお腹を漸く満足させて、食事を終えた。

「そつえばねリーラ」

その矢先のことだった。めったにないことなのにラルタが自分か

ら話し掛けてきた。

「な、なに？」

少し驚きながら答えるとラルタは真面目な顔で聞いてきた。

「今まで黒猫が来るのに予告状が来たって話聞いたことある？」

唐突な話題。しかもまた黒猫のことだ。私は即答しようとしたけれど、一応目を天井にやり、覚えている限りの新聞記事の文面を探つてから答えた。

「……………ない」

「そうよね。私もないもの」

「大体そうじゃなかったら、シャットさんの家が泥棒に入られるなんてないと思うけど？」

あの家は自他共に認める富豪の家なので、そういう警備には特に厳しいのだ。もし何かあればきつと警備する人数が倍になっていたはず。私の言葉にラルタは大きく頷いた。

「ええ…………でもね。予告状の代わりにあったらしいのよ、不思議な出来事」

「どんな？」

きつと私が起きる前に収集してきた情報なのだろうと思う。ラルタは私と違って早起きだから。

「そう黒猫に入られる3日前にね。シャットさんの奥さんが出かけたときに……………見るからにぼろぼろの孤児に会ったらしいの」

「孤児？」

その単語に思わず反応してしまう自分に少し嫌な気分になった。

「そう……………で、その孤児がいきなりシャットさんの奥さんの……………洋服の袂を掴んで瞳を見つめてこう言ったんですって」

『お恵みを、わずかばかりのお恵みを』

「……………って」

「……そ、それで？」

「勿論シャットさんの奥さんは……怖くなって逃げたらしいけど」
言い終わるとコーヒを一口すする。

「や……道歩いてて、普通そんな言い方されたら絶対怖いと思うけど、中にはあげる人もいるんじゃない？」

私ならあげると思う。一歩間違えば自分だってそういう身分だったのだから。

「まあ、恵む人もいると思うけど……奥さんなら……多分駄目でしょう。去るときにおそろおそろ振り返ったら、その孤児が彼女を物凄い目で睨んでたらしいわ。声は聞き取れなかったらしいのだけど……その口の動きは」

『汝に不幸があるように』

「……って言っているように見えたって」

「………そ、それって」

かなり怖い話だ。でも、言われて考え込む。この話、筋は通ってるし、もしこれが奥さんじゃなくてシャットさん自身だったら結果は変わってたと思う。なぜなら彼は誰もが認める『いい人』だからけど、身分を気にする人もその家には多くって。彼の奥さんもその一人。だからラルタはご丁寧にもいつも『の奥さん』ってつける。彼女なりの敬意の表し方なのだ。

「で、盗まれたものは……奥さんのイヤリング。50万のね」

「………」

あながち自業自得と言えなくもない。

「その話を聞いた警察は、その孤児が怪しいって踏んでるみたいなんだけど……その子の人相がコートに目深の帽子。しかも全部黒

ずんでるからよく分からないらしいわ」

それはまた用意周到なことだ。

「その子、黒猫とグルなのかな？」

ラルタに聞いたって分からないだろうに聞いていた。大体彼女の話は全て伝聞形である。

「そうだって意見が多数でてるわね」

「じゃあラルタがもしそんな子にあつたら、ちゃんと何かあげれば問題ないのよね？」

確認してみる。そうすればいくら裕福でも、この家に危害は及ばないはず……。するとラルタは何故か目を伏せた。

「……………多分」

「どうして？」

「だってね……今までの町でどうしてその話が噂にならなかったのかは知らないけど……今はこの件はもう町中の噂だわ。これを聞いた人は確実に彼らに何かを与えるでしょう。そうすると真意は分からないから——彼らは一日おきに町を変えなきゃならない」

いつだって論理的なラルタ。頭の回転もすごく速い。そして確かにその通りだ。

「……………」

「つまり、彼らはそうとは悟られないようなことしてくるわ。きつともっと大胆なこと」

「大胆？」

思わず聞き返してしまう。さっきの事だって結構大胆だと思うんだけどこれ以上何を。

「たとえば、いきなりひったくるとかね」

「……………それは犯罪じゃない？」

いくらなんでもそれはないと思う。けれど更にラルタは続ける。その瞳は感情がなくて怖い。

「あら、もともと犯罪者じゃない。大体人の器を図るならこれ以上の事はないと思うけど？ その人がとられても気にしないかどうか

ってね」

「いや、それ誰だって怒るって」

「じゃあ孤児なら？」

じつと何かを促すかのように私の瞳を見ってくるラルタ。でも私はどう答えたらいいんだろう。彼女にその気がなくなつて、どうしても重い気分になつてくる。

「……………」

黙ってしまった私を見て、急にふつと視線をずらし、ラルタは時計を見た。

「………… 今日私買い物行かなきゃならないんだけど………… あんたも来る？」

これはつまり…………… お誘いだ。ラルタと出かけるなんてどのくらいぶりだろう。一瞬で嫌な気分も吹き飛んだ。

「行く！」

満面の笑みで告げた。するとラルタはそんな私を呆れ顔で見て、

「ねえ犬耳と尻尾しまったら？」

とだけ言った。

「？」

訳が分からず、首をひねる。私そんなもの付けてたっけ？

「いい天気ーやっぱり買い物はいいよね！」

ファッション関係の店が並ぶ中心街のメインストリートを歩きながら、コートにお手製の青いマフラーに手袋姿で普通より大分重い両腕を上になげながら横を振り返った。

「分かったから少し落ち着いてよ。初めての子連れでるみたいで恥ずかしいでしょ？」

でも、緑色のコートと白い手袋、白いマフラーを着たラルタからは、相変わらずのお言葉が返ってきた。

「……ごめん」

自分でも少し子供っぽすぎた行動を反省していると、ラルタは聞いているのかいないのか傍のショールウィンドウを覗いている。

「全く……あらこのリボン可愛いわね」

「えーラルタには似合わないと思うけど」

すぐに気を取り直して、覗き込んで相槌を打った。

ラルタが見ていたのは白いリボン。レースとかのないシンプルなもの。ラルタはショールヘアだから髪につけるならバラとかそういう華のある形の方が似合う。要するにリボンって感じじゃない。だからそんなことどうして言うのか分からずに考え込んでたら。

「あんたによ……」

ラルタがぼそつと言って一瞬その意味を考え込んだ。でも考え終わる前に私はラルタに笑いかけていた。

「ありがとう！」

こういうとき自惚れかもしれなくてもラルタは私が大好きなんだって思えてすごく嬉しい。ラルタがこんなふうに言葉にしてくれるのって珍しいんだもん。あー今日は本当にいい日だね。

「あーはいはい離れて」

そのまま腕を組もうとしたらはたかれた。腕くらい組んだっていいじゃないとは思ってたけど。やっぱり子供っぽくて呆れたんだろうか。

「……………」

私が一人でいろいろ考えて思わず黙り込んだそのときだった。

ドンッ

衝撃と共に体が前のめりに傾いた。いきなりのことだったから、一瞬訳が分からなかったけれど何とか体を立て直す。

何かが私たちの間に入ったのだろうと考えて横を向くと、運動神経はよいほうじゃないラルタが道に倒れていた。その姿が痛々しいのもあったけれど、私は倒れる前と後とで何かが変わっている気がしてならない。

「リーラ、バッグっ」

そう言われて、ようやくラルタの紺色のバッグがなくなっていると気が付いて周りを見回すと、そのバッグは少し先に立っている見知らぬ少年の手にあった。

「なっあの子！」

見た瞬間に瞬間的に足が動いていた。

ラルタが止めようとしていたけれど聞こえないフリをする。

「待ちなさい」

大声で叫んで追いかける。すると少年は我に返ったように逃げ始める。

これ、ひったくりだ。順番は逆だけれど走りながらそう思った。

2・後悔したってもう遅い

「ちっすばしっこい」

追いかけているし距離も確実に縮まってるけれど………その少年は身軽さを武器にとんでもない逃げ方をする。木の上にいるかと思つたら、裏路地に駆けていくし、そうかと思えば屋根の上。

「はぁ……はぁ………待ちなさい！」

律儀に少年と同じルートを通るのでいい加減息も切れてくる。しかもコートの下で首に下げたネックレスがかつかつ鎖骨に当たって痛い。

取ればいいんだろうけど、これをなくしたら本当に大変なことになるから、今までお風呂の時以外は外したことはない。

勿論今も外す気はなかった。

「このぐらいの額恵んでくれたっていいじゃない、わりとしっこいんだね」

裏路地を曲がった時、何故か逃げずに目の前にいた少年が挑戦的な目を向けていた。

顔は路地が暗いからわからないけれど、見るからにお金のなさそうな身なりで、ひったくりが生活にとつて必要だったと語っているけれど、そういうわけにはいかないのだ。

「駄目よ！ それはラルタの大事なもののな。」

他のものならいざ知らず、これは彼女の両親からの大切な誕生日プレゼントだ。

「ふーん。あんなに裕福なのに心は狭いんだね」

「！！！！！！」

なんつつ事を言い出すんだこいつは。思わず少年を睨みつけた。すると彼の唇がゆっくりと動いた。

『汝に不幸あれ』

そんな音が、聞こえた。

「なっ」

しばらく状況理解に勤めて…… やつと我に返った。

今朝のラルタに話を聞いたばかりだったというのに。私もしかしなくてもとんでもないことをやつちやつたんじゃないだろうか。

「ちよつと…… あんたまさか」

すると少年は歳に似合わない含み笑いをする。

「きつとお姉さんの考えてる通りだよ。不幸が訪れる」

直感的にその不幸がどういふものかわかってぞつとする。

「だめ！ お願いそれだけはやめて！」

「…… 駄目だよ。こっちの不手際だったとはいえ、お姉さんはもう知ってるんだから」

有無を言わせない少年の言葉。不手際ということは…… やっぱりこの話が漏れるのは、予想外ということなんだ。いやそれよりも、どうして自分より大分歳下のこの少年の方が、有利に事を進める空気をまとってるんだろう？ なんかこの子、得体が知れない。…… 怖い。

「それは…… 大事な人の父親からの誕生日プレゼントなの！ だから返して！ 代わりにこれをあげるからっ」

でも、こればかりは譲れない。これをなくしたらきつとラルタとつても悲しむから。だからここは精いっぱい頼んでみるしかない。一か八か、自分のしていたマフラーを差し出した。首筋が急に寒くなったことは気にしないようにして一步一步少年に近づく。

「きつとこれで、寒さはしのげるから…… だから…… お願い手を出さないで…… 私の大切な人の幸せ…… 壊さないで」

そのときの私は恐怖も忘れて必死だった。少年の首にそれを巻いてやると彼の瞳が少し優しくなった。

「……………話してみるよ」

彼が言ったのはそれだけだったけれど、誰にかつていうのはなんとなく分かった。

少年はラルタのバッグを私の手に押し付けると、数歩距離を取った。そうなってから、見るからに孤児らしいみすばらしい格好なのに、あんまり不潔な感じがしなかったことに気がついた。けれど無意識に少年に近寄ろうとすると、彼はにっこりと笑った。毒気を抜かれて思わず足が止まってしまう。

「じゃあねお姉さん」

「あ……」

そしてその隙を逃さず、そのまま駆けていった。と思つたら振り返った。追いかけても捕まらない距離で。

「ねえ、名前なんて言うの？」

ターゲットって事ね。そう思つて諦めながら短く答えた。

「リルト」

言つた途端に少年は目を見開いた。

その意味は、私には分からなかった。けれど彼のその目は焼き付けるかのように私の全身をじっくり見ている。特に私の緑の瞳を。そしてまた唇が動いた。

「……汝に不幸あれ」

そう言つて今度は一度も止まらずに、走って行った。

「な、なんなの……よ」

私は思わず、その場にへたり込んでしまった。なんだかもうつぱいいっぱいで、張り詰めていた糸がぷつんと切れたように。

「リーラあんたどこまで行つてたの？　ってマフラーは？」

絶望的な気分で歩いてラルタの元に戻ると……彼女はいきなり自分に駆け寄ってきた。けれどその問いには答えず、を差し出す。

「……はいラルタこれ」

けれど、ラルタは受け取ろうとはせず、代わりに私の肩にそっと手を置く。

「……少し休んだ方がいいわリーラ」

「うん………ありがとう」

促されるままにラルタと一緒に近くのカフェに入った。

そこで勝手にラルタが注文した大好物のカプチーノを飲んでいると、唐突にラルタが黒い瞳を私に向けてきた。

「あんたマフラーどうしたの？　すごく気に入ってたじゃない」

どう答えていいか一瞬迷ったが、丁度窓の外に木枯らしが吹いて葉っぱが風に舞っていたのが幸いだった。

「えっえーっと追いかけてるうちに風で飛んじやつて。追跡中だったら、諦めたの。あーあ、また編まなくちゃ」

まさか私があげましたなんて言える訳がない。でも私は演技が下手だから、きつとラルタには見抜かれているんだろうな。

「ふーん」

彼女の瞳は揺れていて、やっぱり半信半疑らしい。私は話題を逸らすことにした。

「ね、ねえラルタ……その、中身ちゃんとある？」

ラルタの膝に乗ったバッグを指さすとラルタは一瞬呆けて、次にはチャックを開けて中身を一つ一つテーブルの上に出して確認を始めた。数分後。

「ええ……何一つ盗られてないわ」

落ち着いた声でまっすぐ見られてそう言われ、漸く私は緊張が解けていくのを感じた。

「よかったあ」

安堵の声が自然と出た。カプチーノをまた一口飲むとやっと飲んだ心地がしたくらいだ。甘くてそれでいてほろ苦いこの味が昔から大好きで、飲みたい時にくれるのは本当にありがたいことだなと、思ったら、店に柔かい音楽が流れていることにも気がついた。どうやら私は相当動揺していたみたいだ。

やがてラルタは少し長めのトイレに立った。そして帰ってくるなり、椅子にかけていたバッグを持ったのだ。

「……………そろそろ帰るわよ」

おまけにそう宣言する。なんで提案じゃないのだろう。でも今はそれよりも気になることがあった。

「ら、ラルタはもういいの？」

だってあんな騒ぎがあつたからどこにも行つてないのだ。今日は買い物するつて言つて出てきたのに。

「ええ私は用が済んだからいいわ」

……………はずなんだけど。いつ用を済ませたの？

「なんだつたの用つて」

するとラルタはゆっくりとバッグに手を入れた。

「これよ」

そう言つて差し出されたのは、掌に乗るほどの大きさの小さな白い箱。

不思議に思いながらも受け取つて、開けてみた。

外とは対照的な黒い布の中に、丁寧に納められていたのは、さっきの白いリボンだった。

私は、理解が追いつかない。

「こ、これつて——「誕生日おめでとうりーラ」

なんとかかいった言葉を遮られて、初めて気がついた。明後日は私の誕生日だ。

どうやらトイレとか言っておきながら店を抜け出て今買ってきたらしい。

「あ、ありがとうラルタ！」

心からの感謝をこめて、大好きな親友に満面の笑みを向ける。するとラルタは急にそっぽを向いた。

「気にしないで。あんたにも……ありがとう言わないといけないんだから」

言う少し顔が赤い。非常に珍しいことにラルタが照れていた。

確かにそれはとても嬉しかったけれど……だからこそ、思い出してしまった。嬉しかったはずの気持ちは急にしぼんで行って、少年の言葉がぐるぐるぐる頭のの中に回りはじめて、どんどん肩が重くなる。嬉しかったはずなのに、せつかくラルタが買ってくれたのに、家に帰りつく頃には楽しい演技すらできなくなっていた。

『汝に不幸あれ』

あーもう、どうしよう……。

同時刻リーラの悩みの種の少年は走っていた。そこは既に道なき道といった方がいいかもしれない。裏路地だし、狭いし、彼以外誰もいない。とても殺風景な場所だった。やがて少年はある一角に立ち止まって声を掛ける。

「ただいま！」

その途端、今までどこにいたのかその場の高い塀の上にすっと降り立ったのは……黒い影だった。顔は時刻のせいか、もともとこ

ここに明かりが差し込まないせいか、暗くてよく見えない。

「獲物は？」

影から発せられたのは低いアルトの声。

「兄さん。それがね」

少年は先程のリーラ相手のときとは打って変わって彼に幼く甘えるような声で話しかけた。

「なんだ？」

『兄さん』と呼ばれたほうは怖い印象だが、彼の話を聞く気はあるらしい。

「ひったくつたはいいけれど……取り返されちゃった。代わりにマフラー受け取ったけど」

うつむいて言う少年。その首にはしっかりと青いマフラーが巻かれている。

「で、名前は、聞いたの？」

別方向から声がした。この声は少し『兄さん』よりも高い。背の高さは彼と同じ位で少年であることも間違いはないが。

「それが……『リルト』って」

その方向に向かって意を決したように言う。するとわずかに堀の上で黒い影が動いた気がした。

「……」

その意味が分かったのか少年は声を弾ませた。

「ねえ兄さん？　もしかしてもしかするかもしれないよ？　聞いた

とおりの容姿だったし」

「……まさか」

心底否定するような声。すると更に少年は続けた。

「だって覚えてないんでしょう？　どの街だったか」

「……」

「どうするの？　あの子の家……襲う？」

いつでもこの少年が会話を続ける役らしく、それはリーラ相手にもあんな喋り方になるのは仕方ないだろう。

「……………」

しかしそれでも黙ったままの『兄ちゃん』。

「……………」どうする?」

高い声が彼を促すも

「……………」お前はと思う?……………」

逆に『兄ちゃん』がもう一人の方を向いて問いかける。相当迷っているようだ。

「俺は……………」そうだな。確かめる価値はあると思うよ」

「……………」どうするの?」

それを受けて少年がまた聞く。すると『兄ちゃん』は溜め息をついた後で、空を見上げ、誰に言うでもなく呟いた。

「……………」始めるか」

低い声が闇に溶ける。既に太陽は地平線の下に沈んでいた。

3・それぞれの時間

一方そんな会話が行われているなんて露知らず。夕食前のディロツト家の一室には綺麗な夕焼けと不釣り合いなほどの暗澹とした空気が充満していた。

「どうしたらいいんだろう……」

リーラは椅子に座って、自室で頭を抱えていた。

「やっぱりラルタに言うべきかなあ」

そう言って立ち上がったかと思えば、

「……………言えないよね」

また座り込み

「私が悪いんだし……」

と俯いて

「はああああ」

頭を抱えるのである。

そんなこんなをさつきから彼女はずっと繰り返していた。

『汝に不幸あれ』

不幸って一体誰にだろう？ 言葉の意味を考えればリーラ自身だ

けれど、この家に、ならばラルタやラルタの両親にも危害が及ぶ。

それだけは避けたくて、でも自分ひとりではどうしようもない。だからずっと悩んでいる。

「ああーどうしよう」

「なにがよ」

「だーかーらー私のミスで近いうちに黒猫がこの家に来るかもって——ってラルタあ!？」

全部暴露してから、声の主に気付いて悲鳴を上げた。対するラル

タはいつ入ってきたのか知らないが、妙に落ち着き払って私のベッドに優雅に座っている。

「ふう……こんなことだろうと思った。あんたって嘘つけないタイプよね」

「ご、ごめんなさい」

私はこれ以上下げられないくらい頭を深々と下げた。

「頭を上げなさい。今しなくても、逮捕した後で謝罪はいやというほどしてもらってから覚悟しときなさい」

「……………ハイ」

その凜とした声に従わざるをえない空気を感じて急いで顔をあげる。

「さて、どうしたものかしらね。まず、父様や母様に言わないと。ほらっ行くわよ」

立ち上がって歩き出そうとするラルタに私は立ち上がって頷いた。

「うん……」

でも元気なんてわいてこない。ラルタはそんな私の様子を見かねたんだろう。盛大なため息をつかれてしまった。そして息をすうつと吸い込む音がして。

「そんなに気にしてる暇あったらとっとと下降りて、金目の物を隠すの手伝いなさい！」

非常に珍しいことに怒鳴られた。

「は、はいっ」

私は慌てて弾かれたように部屋を飛び出した。

「全く世話の焼ける」

そう呟いてからラルタは部屋を出て行った。

「ふう……………疲れた」

自室で伸びをしてパジャマ姿でベッドに倒れこむ。青い宝石のつ

いたネックレスに首が押さえつけられて痛かった。

あれからラルタの両親に正直に言ったところ、彼らは文字通り腰を抜かした。しかしそれもつかの間、ラルタの声で皆各自のネックレスや指輪を食堂に集め（私とラルタのものはないけれど）、家の地下の金庫に隠した。

けれども幾つあるか分からないほどある壁の絵や置物などはどうしようもないということで、隠す作業は適当なところで切り上げられた。既に金庫はいっぱいになってしまったというのもあるけれど、そしてシャワーを浴びて今に至る。

時刻は既に11時を回っていた。

「でも私が……………守らなきゃ……………責任ある……………し……………」

全て言い終わらないうちに、リーラの瞼は疲れの為か急激に重くなり、猛烈な勢いで夢の世界に引き込まれていった。

同時刻、すっかり寒くなった街の空に不釣り合いな影があった。

「……………あの家か」

「うん……………結構もってそうだね」

「……………ターゲットは？」

そんなことを言いながらディロット家を、近くの手ごろな家の屋根から双眼鏡片手に眺めている三つの影があった。

その一つはあの少年らしく、一つは『兄ちゃん』。一つは高い声の青年だ。だが、三人の顔はまたしても暗いので見えない。

だがその方が発見されにくいから彼らにとっては都合がいい。今夜は月がないのである。

「えっリルトじゃないの？」

『兄ちゃん』が聞いた声に、少年が驚いた声を上げながら彼を見る。

「あいつは金目のものなんてもってないだろう」

即答した『兄ちゃん』に少年は首をかしげる。

「何で分かるの？」

「……………」

彼は黙り込んでしまった。すると少年はぶうと頬を膨らませる。

子供らしい仕草だった。

「もう兄ちゃんはいつも自分の都合悪くなると話終わらせるんだから」

「仕方ないよティム……特に今回は」

横からそんな二人の声を聞いていたのか、仲裁に入る声。

「そんなこといったってね。あんちゃん」

声のしたほうを振り返り、一生懸命自分の正当性を主張する少年ティム。

一方『あんちゃん』と呼ばれた男は夕方会話に参加してきた声の高い青年のようで、返事の代わりに溜め息をついた。

「……………もし逢ったとしてもどうすればいいかなんて分からないだろう」
「……………」

その声に黙り込むティム。

沈黙がその場を支配した。

だがやがて、その沈黙に耐え切れなかったかのように、唐突に横で影が立ち上がった。

「そろそろ帰るぞ」

「……………はい」

「わかった」

素直に立ち上がる二人。そして三人の影は闇に消えた。

私は不安を抱え込んで、やっと弧に見え出した細い月を見上げた。
「あれから3日」

夕食後、すっかり日が落ちてから、私はラルタの部屋にやってきた。ラルタの部屋はシンプルで椅子もないから、いつも私はベッドに座る。

「来るとしたら……今日ね。シャツトさんの話だとその子供に会って3日後だったらしいから」

ラルタの声もいつになく硬い。彼女は金目の物を隠している間にも、ぬかりなくシャツトさんから黒猫の情報を聞いていたようだ。

「きつと来るよ……」

そう言う私は今日寝るつもりはない。シャワーは浴びたけれど、ラルタの様に部屋着ではなくて制服を着ているのはそのせいだ。

「あのね……元はといえばあんたのせいなのよ？ 分かってる？」

「スミマセン」

もう私はうなだれるしかない。

「じゃあ今日は戸締り万全にして、備えましょう」

いまだに罪悪感で一杯の顔をしている私にラルタの母親のティスさんは優しい笑みを浮かべてくれる。ああ、申し訳なさ過ぎて逆にいたたまれなくなる。

「母様……」

「おばさま」

「リーラちゃんのせいじゃないからね。気にしたら怒るわよ？」

しかし、笑みを浮かべながらも有無を言わせないその言い方はラルタそっくりで。彼女の気の強さは母親譲りなのである。

「……ハイ」

自分を責めないでくれるこの家の人たちの心の広さに、感動を覚えながら頷く。涙が零れそうになるけれど、精一杯堪えた。

「よしじゃあ各自持ち場について」

「……はいっ」「……」

ラルタの父親のシェーマンさんが無表情で家の皆に言う。つまり彼女の性格は父親譲りということ。

ちなみに警察にはもうとくに持ち場についてもらっている。前回シャット家の件があったのでリーラの不思議な話をした途端飛んで来てくれたのである。

シャットさんには悪いけれど二番目でよかったと思わずにはいられない。勿論こんな事考えているとラルタにばれたら……殺されるだろう。けど私は、これを幸運と思えないような綺麗な場所で生きているわけじゃない。

だから黒猫退治にも参加するってディロット家の人たちを言うくめるめたし、準備だつて整えてある。

さあ、絶対盗らせないわよ。どこからでもかかってらっしゃいっ

ほぼ同時刻。この警備万端の家をすぐ近くの建物の屋上から見ている三つの影があった。

「ねえ……兄やん、なんか楽しそうだね」

いやむしろ、そういう彼の声の方が楽しそうだった。なにせ『楽しそう』といわれた彼の表情はまたしても見えないものだから、声だけで判断するならティムの方がそうなのである。

「ティム……この格好の時はなんて呼ぶって言った？」

その『兄やん』は声のしたほうを振り返り、楽しいとは程遠い低い声を出す。もともとかなり低い声なので、その声はドスが効いていて少し怖い。真っ向から怒られたティムは少ししよげてしまった。

「……黒猫」

「よし」

短く肯定した彼こそまさに……怪盗黒猫だった。

「何でわざわざそう呼ばすのさ」

少しだけ声に呆れを混ぜて、『あんちゃん』が会話に参加してた。けれどその言い方は彼が『黒猫』と呼ばれる理由を知っていてあえて問うものだ。

「……………」

その言葉に黒猫は黙り込み……答えるのを拒むかのようにその手に持った仮面を顔に着けた。口だけが見える黒い仮面。正体不明の黒猫の出来上がりである。

それから彼はゆっくりと傍にあつたマントを手にとって羽織った。その時にバサツと広がったそれはまさに闇。

そしてその音に重なる『あんちゃん』の声。

「いい加減。もう忘れたら？ あれは仕方ないって皆言ってたじゃん」

「赦されるならな」

「……………」

少し開けた口調とそっけない言葉なのに、重くなる空気、そんな二人をいち早く察して、ティムが急に声を挙げた。この小ささでかなりの苦労症である。

「に、にい、黒猫、どうするの？ 万全にされてるはずだよ警備」慌てて話題を変える。だが、思わず『兄ちゃん』と呼びかけかけそうになるところが、まだまだ仲裁役としての未熟さを感じさせる。

しかし黒猫はその言葉に怒りを表しはせず――

「だったら正面から行くのみだ」

とだけ答える。するとティムは、何故か目を輝かせた。

「すごい黒猫！ほんとに怪盗みたい」

「ティム、もうお前喋るな」

耐え切れなくなったのか、彼は『あんちゃん』に一喝された。確かに彼の話のペースにあわせていたら、いつまで経っても話が前に進まない。

「……………」「ごめんなさい」

またしても、しょげるティム。黒猫はそんな彼を横目で見たような仕草をしたかと思うと、立ち上がった。

「……じゃ行ってくる。細工は頼んだ。1時間後にいつもの場所だな」

黒猫は一瞬振り返ったかと思ったら、それだけ伝え、その1秒後には屋根の上から飛び降りていた。

「了解。頑張つてね黒猫」

「……………」

その姿を全く異なった表情で見ていた二人はやがて順々に屋根から下りて行った。

3 ・それぞれの時間（後書き）

この話の書きだし部分は、ずいぶん前に書いたもので、書き方も今と全然違います。それに自分でびっくりしています……。

4・GAME START

バリイイイン

蝋燭が数本あるだけの食堂の窓ガラスが勢いよく割れた。破片がバラバラとあたりに散らばる。入って、いや侵入してきたのは……黒マントに黒髪に黒い仮面の男。黒猫だ。

怪我をした様子もなく絨毯の上に音もなく着地する。

「でたっ黒猫お！」

私はその派手な信じられない登場の仕方にかなり興奮して椅子から立ち上がる。

「ほんとに仮面つけてるのね」

対するラルタは焦るでもなく、しかもコーヒーを飲みながらのんびりしていた。

ちなみに私達は黒猫の入ってきた場所からかなり離れた所にいたので無傷だ。

「ラルタ！ そんな暢気なこと言ってる場合じゃないでしょ！」

私は叫びながら、きつと黒猫を睨み付ける。その黒猫は、あまりの二人の反応の違いと、そんな会話を聞いていたのかいないのか……微かに笑った気がしたが、今はどうでもいい。

この場所、つまり食堂は一番金目のものが何もないので、私達が守ると警察に訴えた場所だった……主に私が、だってラルタはやる気ゼロだもん、それでも付いてきてくれるのは、きつと心配されているからだと思う。

勿論ここが進入経路だとは私も思っていなかった。つまり鉢合わせは全くの偶然だ。けれどこのチャンスのがしてなるものですかっ。「黒猫！ この家のもの盗れるなら、盗ってみなさい！！」

私は大声で宣戦布告をした。きつとこの声で警官達が来てくれる

はずだ。

「……………」

しかし、そんな私の行動に恐れをなすこともなく、彼は黙り込んで止まったままだ。私は戸惑い彼に近付こうとおそろおそろ歩を進める。と、急に黒猫は我に帰ったように、私の脇を走り去り食堂を後にした。わ、私の横を抜けるって、どういうことよっ！？ あんまり反応が早くてついていけなかった。

「あつ待ちなさい！」

それでも私は懸命にその後を追った。

「……馬鹿なんだから」

その姿を見て、ラルタはぽつりと呟く。逃げるものを見れば追う。追う方はいいかもしれないが、見ている方はいい加減に疲れるのだ。

「まあ……仕方ないわね」

誰にも聞こえない声は空間に消え、消えた言葉はもう返らない。聞く者がいなければ。

食堂から出て追いかける私の目の前には今勿論黒猫がいる。そしてその目の前には大勢の警察……がいてもよかったのに……何故か皆ぐうぐうと眠りこけている。傍の窓が開いているところを見ると、彼等は何かされたらしい。でも一体誰に？ 黒猫に仲間なんかいたの？

でもそれよりも黒猫の足の速さに驚く。これは確かに捕まえられないわけだ。私、結構足には自信があるけど、ついて行くのやつとだもの。中年の警察官じゃ、無理があると思う。嫌勿論体は鍛えてるんだろっけど、しなやかさが違う。ってことは黒猫は結構若いん

だろうか。

そんなことを考えながらも足は必死で黒猫について行った。彼は廊下を走りぬけて見えなくなったが、角を曲がると一番豪華な扉、つまりそれだけ調度類や絵画の多い大広間に黒いマントが消えるのが間一髪で見えた。当然かもしれないけど黒猫の頭の中には屋敷の図面がしっかりと描かれているらしい。

私が部屋に入ったとき、その不気味な姿は部屋の中を眺め回していた。

「さあ！ 観念なさい！」

その声に驚いたように振り返り、私を見て少しだけ口を開けた黒猫。何に戸惑ってるんだろう。大方私の足の速さにだろうか。何でもいい。これはチャンスだ。

私は一気に黒猫との距離を詰め、素早く足を繰り出した。

ひゅっ

が、私の攻撃は体をひねって難なくかわされてしまった。渾身の蹴りは空を虚しく切るだけ。でもめげずに体制を立て直して攻撃を続ける。なのに身軽な黒猫には全て避けられ傷一つ付けられない。すばしっこくて、なのに彼は逃げない。なにか楽しまれているようだ。完全に遊ばれている。怒りばかりが沸き起こり時間が過ぎていった。

いくら避けても彼の息は全く上がらない。私は15分近くやらされてこんなに苦しいのにつ

大分息が上がってきた私を見て、彼は口元だけでもわかるほどにやりと笑う。ああ、はつきりと馬鹿にされた。私が爆発した怒りに

まかせて飛び出そうとした瞬間。

だんっ

勢いをつけたと思ったたら信じられない高さまで飛び上がり、私の頭上を軽々飛び越えていく。

「しまっ……」

そして彼が着地した先は、ある絵画の上だった。

「これは試合じゃない……ゲームだ。それを忘れたお前の負けだ」
低いアルトの声で、きつい一言。確かにそうかもしれない。何も言い返せないでいるうちに、彼は絵画をどうやったのかいつのまにか壁から外して、杵ごと持ち上げている。

私が振り返るまで10秒もなかったはずなのに。

あまりに鮮やかな動きにやっと私が彼の方へと動き出したのは、
「……………」

黒猫が既に視界から消えた時だった。傍にあつた窓を手品の様に開けて飛び降りたのだ。本当に猫みたいな奴だと思う。

「待ちなさい！」

慌ててその窓に駆け寄るも……………既に庭には闇夜が広がるだけで、黒猫の姿はない。

「くうっ」

壁に手を打ちつけて、素直に悔しさを表現するしかできなかった。分かっていた分、誰よりも有利だったはずなのに。

「……………盗られたのね」

気がつくと後ろにラルタが立っていた。全く驚いた様子もない。確かに成功率100パーセントの怪盗じゃ、こんな子供には捕まえられないって言う理屈は分かる。でも、でもっ分かっても捕まえたかった。

「ラルタ……ごめん……」

うなだれて声を絞り出す。彼女はこちらに向かって歩いてきた。私が、何らかの説教を覚悟した時、そっと肩に重みがかかった。おそるおそる目を開けてみると、ラルタが私の肩に手を置いていた。「いいのよ。それに……あのぐらいのもの構わないわよ、ね。母様」そうしてラルタは後ろを振り仰ぐ。あのぐらいつて、あの絵画、300万はするんじゃない。……お金持ちは考え方まで違うんだろっか。私が呆然としていると、背後から出てきたのはおばさまだった。「ええ、それよりリーラちゃんが無事でよかった」「怪我はないかい？」

おじさままで！ 本当になんで気配がなかったんだろっ。それとも私のシヨックが大きすぎたのか。「すみません……逃がしちゃって」

それに、どうしてこんなにいる人達なんだろっ。私が頭を下げられるだけ下げると、

「ねえ……気にしないでって言わなかった？」

またあの有無を言わせない瞳がむけられる。実は苦手なんだよね……この瞳。

「……………ハイ」

私が不承不承に頷くと、おじさまが溜め息をついた。

「悪いがリーラよりも悪いが警察の方が無様だろっ……なんで全員眠りこけてるんだね？」

「睡眠薬でも嗅がされたのかしら？」

「そのわりには私、この部屋に入って眠くなんてなかったけど？」

「……………」

腕を組んで考え込む私達4人。すると話声に反応したのだろうか。「……………うん」

近くでうめき声がした。見ると警官の一人が目を覚ましている。私は慌てて駆け寄って起き上がろうとしていた彼に手を貸す。

「大丈夫ですか？ 何があつたんですか？」

彼は夢見心地な瞳をして遠くを見ていた。はっきり言えば目の焦点が合っていないのだ。

「見慣れない男が………いきなり現われて……丸いものがついたものを振ったかと思つたら皆倒れて……気がついたら今………みたいですよ、ね」

最後の方はばつが悪そうに言われた。でも私、彼を責める気なんかこれっぽっちもない。むしろこういうことだろうと、今にも答えが浮かびそうなパズルを目の前に出されたような気がして、一生懸命頭を回転させはじめた。

「………催眠術でしょうね」

私の頭の整理がつくまえに、ラルタの落ち着いた声が出た。

確かに当てはまる事といえはそのぐらいだ。私も何度か街で見たことがある。掛けられた人はまるで嘘のように……手足をばたつかせて鳥のような動きをしたり、ものすごく熱い熱湯に平気で手を入れたり、掛けられた瞬間どんなに揺り動かしても起きなかったり……そんな不思議な技なのだ。

「はあ………」

「だから………」

またしてもラルタが納得したような声を出す。もうっラルタばかり分かつてずるい。

「えっ何？」

「黒猫の御告げが噂にならなかった理由よ」

「ああ……催眠で忘れ去られてたつてことね」

おばさまの言葉に、やっと納得がいく。普段はめつたなことでは何にも関心を示さないラルタだけれど、不思議がつてたことだからずつと考えていたらしい。でも、私、まだ分からないことがある。

「じゃあどうしてシャットさんの奥さんは免れたの？ 確か不手際とかあの少年は言つてたけど………」

「それは多分あの人……大勢のお供なしでは絶対に何処にも行か

ないからでしょう？ 寝る時すらボディガードがいるもの」

ラルタが苦々しげに吐き捨てた。好き嫌いはつきりしているラルタらしいなあ。

「ね、ねえ、もう黒猫来ないよね？」

話が一段落したところで一応聞いてみた。今日一日で破壊された窓ガラスの修理代だけでも膨大な額だ。なのに

「……さあどうだか」

おばさまとおじさまはなぜか顔を見合わせて含み笑いをする。な、何、なんか怖いんですけど。

「お、おじさま？ おばさま？」

思わず二人の名前を読んでみたけれど……何故か答えてくれない。代わりにおばさまが私を見た後に夜空を見あげた。

「……今頃悔しがってるんじゃない？」

そしてくすりと笑ったのだ。

うーん、ディロット家の人って本当に何考えているのか分からない。

そして彼らはティスの言った通りに今まさに屋根の上で唇を噛みしめていた。

「くっそ……これまさか」

『あんちゃん』がありえないという声で呟く。

「ああ………そのまさかだ」

黒猫が仮面をつけたままで拳を握り締めた。

「こんな……こんな事今まで初めてだよ」

幼いティムは今にも泣きそうな声だ。

「なあ……お前ランダムに選んだんだろ？」

『あんちゃん』は確認するかのように黒猫を見る。

「ああ……物凄い数のギャラリーの中から」

「……………こんなに手の込んだことしてるなんて」

すると黒猫は——その口元に笑みを、ただし口の端だけに浮かべた。

「そっちがその気なら。こっちにも考えがある」

そして立ち上がる。その顔はわからないけれど、ものすごく怖いオーラが溢れていてティムは思わず『あんちゃん』に近寄る。

けれどその『あんちゃん』もおびえているようだ。

「……………何する気？」

恐る恐る問いかける。すると黒猫はこれ以上『楽しい』という感覚を捻じ曲げて出る声はないという声で。

「ぶっ倒れるまで……………やってやるのさ」

とだけ言った。その意味が分かってティムはまた怯え、『あんちゃん』にしがみつく。

「……………鬼」

あんちゃんは嘆息しながらそれだけ言った。

「鬼はどっちだよ？」

間髪入れない黒猫の声。二人の仲裁役である『あんちゃん』はこの話題から離れようと口を開いた。

「……………まあそれはいいとして、例の少女はどうだったの」

すると黒猫の周りの『楽しいこと』オーラはいくらも収まった。ティムのしがみつく力が幾分か弱まる。

「……………栗色の髪に緑の瞳、確かにティムの言ったとおりだった」

「でしょでしょ」

もう怖さは感じなくなったのか今度は瞳を輝かす少年。子供って忙しいと思わずティムを見た『あんちゃん』。

「けど……………まだ分からない。ものすごくおてんばだったし……………」

あいつらなんかに肩入れして」

「……………そりゃ人は変わるよ」

『あんちゃん』が言うものの、彼は口をつぐんだままだ。そんな彼

をみて、ティムは『あんちゃん』に耳を寄せた。

「……黒猫らしくないね」

「……こういう時は人の意外な一面が垣間見えるものだからね」
訳知り顔でそういう『あんちゃん』に対して、ティムは訳が分からないといった顔。

「……こういう時？」

「ティムにはまだ早いよ」

ぽんとティムの肩を叩く『あんちゃん』。それで話はおしまいというかのよう。

「何それ？」

不服そうな声をだすティム。けれどもそれ以上何を言っても、『あんちゃん』は何も答えてくれなかった。

「……いぢわる」

彼のそう呟いた声を最後に三人は黙り込んだ。いや、ティムが話すのをやめたから静寂が訪れたのかも、しれない。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5694y/>

True Night

2011年11月17日03時25分発行